

油彩

(テンペラ併用)

ガラスの静物を描く②

三浦明範の静物画講座

みづらあきのり 1953秋田 東京女子大学卒 文化庁主催現代美術展、セントラル美術館
 油絵大賞展、昭和会展、安井賞展、具象絵画ビエンナーレ、日本の絵画新世代展、両洋の眼、現
 代の絵画展、21世紀の旗手展などに出品 文化庁芸術家在外研修員としてベルギーに滞在(96
 ~97) 春陽会会員

■油絵具のメディウム(4)
揮発性油・その他について

これまで、乾性油と樹脂について書いてきましたが、最終回は揮発性油が中心です。

ところで、私はベルギーに滞在中に、筆洗油を求めて画材店に行ったのですが、どこにも見当たりません。必死に説明して(カタコトで!)、最終的に渡されたものは、ペンキのシンナーとして売られている「ホワイト・スピリッツ」でした。

というのも、その画材店に塗料コーナーがあるというのではなく、塗料屋も画材屋も渾然一体となっていて、絵具の隣にペンキが並び、顔料や膠や他の材料、道具が、どちらの区分ということなく置かれているのです。もちろん、日本の一般的な画材店のような店もありますし、ペンキ屋はちゃんとペンキの看板を出しています。さらに伝統的な画材屋さん、店という

よりは工房とでも言えそうな所で、頑固そうなおじさんが手作りでカンヴァスを作ったり、絵具の材料を量り売ったりもしています。

後で判ったことですが、あちらの画家の多くは描画用にも、このホワイト・スピリッツで晒っていたのです。当然ながら、画材メーカーのペトロールやテレピンは市販されてはいませんが、多分、単純に値段が安いということなのでしょう。

それからというものの、わざわざ遠くの画材屋には行かずに、アパートの斜め向かいの金物屋で手に入れることにしました。

考えてみれば当たり前の事で、日本ではフランスの伝統がないため、塗料と絵具が区分されていますが、壁に塗るのかカンヴァスに描くのかの違いだけで、ペンキも油絵具も元々は全く同じものなのです。むしろ、その科学的な研究では、塗料の方がはるかに進んでおり、絵具はその結果を利用して

いるくらいなのです。

私自身、この講座で使用している材料は、チューブ絵具以外はすべて塗料用の材料です。たとえば、テンペラ用の顔料はペンキ材料店、膠や体質顔料、油樹脂などは塗料問屋さん、というように。もちろん、このような入手方法では、少量というわけにはいきませんが、何年か分をまとめてということになります。

■揮発性油

揮発性油の使用の起源は、これもまた明らかにされていません。特に、油絵具の黎明期に使用されたという記録はなく、レオナルド・ダ・ヴィンチのノートにテレピンの使用が記述されている程度なのです。

しかし、ワニスの溶剤として相当古くから使われていたのは、疑いようのないことと思えます。というのは、この製法はブランデーやウイスキーなどの蒸留酒と同

じものですから、技術そのものはかなり古くからありましたし、すでに1世紀には、プリニウスがテレピンの溶解力について触れているからです。

次に、画用として市販されているものを挙げてみます。

①テレピン(ターペンタイン)

植物性で、樹脂を蒸留して得られます。

溶解力(樹脂などを溶かす力)

と揮発性(乾いて無くなる)が強いのが特徴です。古くなると、ヤニのような濃が発生しますが、絵画にとつて有害なものですので、出来るだけ新鮮なものを使用します。缶入りなどで購入した場合は、小瓶に分けて空気の量を出来るだけ少なくします。

テレピンに比べて、溶解力と揮発性が弱いのですが、浸透力は強いのが特徴です。

ちなみに、ペトロール(Petrol)とはフランス語で灯油ということになりましたが、英語ではガソリンという意味になります。そのため、混乱しないように white spirit と称しているのです。

③アスピック(スパイク・ラベンダー・オイル)

テレピンより揮発性は劣りますが、溶解力は勝ります。

芳香成分がありますので、他の揮発性油においが嫌いな方は、これを使用したり混ぜたりする使い方があります。

■揮発性油の用法

揮発性油は、樹脂の溶剤として、また、乾性油の希釈材として使われます。日常的には、いわゆる溶き油に入れて、筆の運びを滑らかにします。



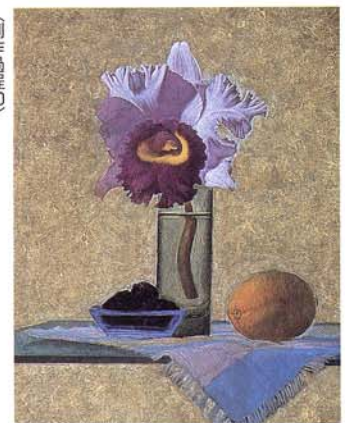
(制作過程7)
前までの制作



(制作過程8)
最初の油彩固有色。暗部の色彩を基準にする。花には青味としてウルトラマリン・B、レモンにはオリブがかかった色味として、カドミウム・Yとアイボリー・B。その他、コバルト・B、カドミウム・R、カドミウム・レモン、シルバー・W。



(制作過程9)
背景にも固有色。ロー・シェンナ、バイント・シェンナ、アイボリー・B、シルバー・W。これも最終的な色ではなく、暗部の色として塗布。



(制作過程10)
もう一度テンペラ白で花を起す。



(制作過程11)
他のモチーフも同様に起す。これでようやく中間の明るさが完成



(制作過程12)
花とレモンに二度目の油彩固有色。いわゆる、見えるそのままの色彩で塗る。ウルトラマリン・B、クリムソン・レーキ、カドミウム・Y、アイボリー・B。



(制作過程13)
同様に、他のモチーフにも油彩固有色、コバルト・B、カドミウム・P、ヒリジアン、クリムソン・レーキ、シルバー・W。壁には、混合白で凹凸を強調し、明るさを戻す。



(制作過程14)
さらにテンペラ白で明部を起す。

よく使われる揮発性油は、テレピンとペトロールでしょう。どちらが良いかという点では、その用途にもよりますが、総合的には、ペトロールに軍配が上がります。つまり、テレピンには揮発残留成分があり、精製度の高いフレッシュなものを使用しないと、これが画面に悪影響を与えかねないのです。この講座ではテレピンが使われていますが、これは、樹脂への溶解力の強さと、揮発の早さという点から用いているのです。もちろん、この注意を守った上で使用することを心がけます。

逆に、広い面積をムラなく塗ろうとした場合は、テレピンでは揮発が早過ぎると感じることもあります。特にこの講座で使用している油メデイウムは、樹脂分が多いので、大作を描く時などは、塗った端から固化していきまます。その場合はペトロールに置き換えてあげればよいわけです。

メデイウムへの配合は、下の層ほど揮発性油を多く(油・樹脂分を少なく)、上層ほど少なく(油・樹脂分を多く)、ということになります。

つまり、揮発成分を多くすることで、その下の層に油・樹脂分が

浸透し、結果的に一体化しながら上層には微かな吸収性が生まれるのです。しかし、このままでは絵具の固着力は弱いままでですから、その上の層には次第に油・樹脂分を多くしていき、最後には完全に浸透を止めるようにします。このようにして作った画面は、お互いの層が浸透し合って、ひとつの塊になりますので、堅牢性を持つ理想的な画面が作られるのです。

よく、艶のある画面を嫌って、揮発性油だけで溶いた、ばさばさな絵具で描く人を見かけますが、これはとても危険なことですよ。とともに、油絵具は光沢画法のために発明されたものですので、油絵具を使うことは光沢を出すことと同義語なのです。しかし、それでもと言う場合には、蜜蝋やパラフィン・ワックスを混ぜて光沢を抑えることもできますが、輝きが鈍くなるだけで光沢が完全に消えるわけではありません。

■その他のオイル類

①シツカチーフ

言わずと知れた、乾燥促進剤です。主成分は、コバルトや鉛、マンガンの金属塩(金属石鹼)で、酸化重合を促進する成分にな

ります。油絵具の乾きが遅いと言つて、これをむやみに入れることは、もともと危険なことですよ。以前にも書きましたが、チューブの中には、すでにバランスよく配合されています。さらに混入することとは、このバランスを崩すことになり、大量に入れたものは、亀裂や剥離、表面の縮れを起こしてしまいます。

どうしても入れたければ、すべてに均一に混ぜ、決して下の層より上には多く入れないことです。

また、最近では乾燥促進のための「ストロング・メデイウム」とか、「ドライイング・メデイウム」という、チューブ入りのメデイウムが市販されていますが、これは、シツカチーフとはまったく別の物です。主成分はアルキド樹脂で、この樹脂分の乾きの速さを利用したもののなです。これと同じ成分のものに、リクイン、ウインジェール、オレオパスト(いずれもニエートン社)があります。

また、同じシツカチーフと言う名がついていますが、フラマン・シツカチーフ(ルフラン社)、ハーレム・シツカチーフ(ターレンス社)というのは、乾燥促進剤ではなく、コーバル樹脂を主成分とし

た描画用ワニスのことです。

②蜜蝋

蜜蝋は、字面のごとく、ミツバチの巣を煮詰めて採取します。ヨーロッパあたりでは、今でもローソクはこの蜜蝋から作られていて、燃やすとほのかな蜜の香りがします。これを画用に単独で購入する人は稀でしょうが、知らず知らず

に私たちは使っています。それは、絵具にすでに混入されているからです。一時的に、盛り上げた絵具の状態を保つのに利用されています。また、つや消しワニスにも含まれます。

自分で液状にするには、湯煎したテレピンにこれを入れて溶解します。大量に使用した場合、上に乗せた絵具はつきが悪くなってしまうので、できるだけ最上層部のみを抑えた方が良いでしょう。

③その他。××メデイウム、××ワニス、フキサチーフ(定着液)、ミクスチオン、ゴールドサイズ、などなど

これらの画用液は、これまで説明してきた材料を組み合わせたものです。各々の使用法は、ラベル

に印刷されていますのでそれに従いますが、最近では、メーカーも成分を明記する方向に動いていますので、その効果のみでなく、成分も見るように心がけましょう。成分が分かれば、その性質や使用上の注意点が必然的に知れるのです。

■ガラスの静物の制作

さて、前号の「ガラスの静物」の続きですが、説明が長くなりましたので、図版のキャプションをご参考ください。

今回の制作でも、「生もの」の部分はあるべく先に描き進めていきます。逆にガラスや背景の壁などは後回しにしていますが、あくまでも完成時のイメージがきちんと出来上がっていることが前提になります。これが無いと、全体のバールが狂ってしまいます。

また、テンペラ白での浮き出しなどは、何度も同じ行為を繰り返しているようにも見えます。これは、一回でイメージ通りの明るさは出し切れないのです。繰り返すことでより明るくなるとともに、密度も濃くなつてきます。

今回は、完成まで至りませんでした。次回に続きます。



(制作過程15)
油彩固有色。2度目とほぼ同じ色を使用。
これで大体の様子が見えてきたところ。あと、一息で完成。